

## 憲法と映画(105)『木の上の軍隊』

<かな>

戦後80年の夏は、これまで以上に先の戦争や原爆をテーマに取り上げたドラマや映画が取り上げる企画が例年以上に多い。この作品もその一つで実話に基づいたものです。舞台は沖縄本島の本部(もとぶ)半島から数キロ離れたとんがり山が象徴的な伊江島。1945年、近海が米軍艦で埋め尽くされ艦砲射撃と戦闘機の攻撃で壊滅状態の日本軍の中で、たった2人生き残った上官の山下と二等兵セイジュンの物語です。彼らは敗戦から2年間もガジュマルの木の上をねぐらに援軍が来ることをひたすら信じて、食うや食わずの生活を始めるのです。セイジュンが地元の人間だったためどれが食べられる植物の実か、どの虫が食べられるか判断できたのでかろうじて生き延びるすべを得ます。それでもお腹を満たすことはできません。



ある晩、木から降りて当たりを探索していると、米兵たちが酒を飲んでドンチャン騒ぎをしている場面に遭遇します。身を潜めながら翌日そこに行ってみると缶詰などの食料が投げ捨てられているのを発見して食生活は格段に改善します。すでに戦争は終わっていたのですが彼らには何の情報手段もなく、相変わらず昼間は木の上身を隠し夜に活動するという昼夜逆転の生活しています。ある時森で見つけた米軍のパラシュートは雨の日のカッパ代わりに、うす汚れた軍服は米軍が捨てた服へと替わっていくのです。戦争が終わったことも知らない彼らが米軍のゴミ捨て場で見つけたたばこ缶やヌード雑誌の取り合いには滑稽に見えてクスツと笑ってしまいたくなるシーンもあります。

でも唯一地上戦が行われた沖縄で、日本軍が住民を見捨て県民の4人に1人が亡くなったという事実を知っている私たちにとっては、どんな理屈を並べても戦争を絶対に認めるわけにはいきません。穏やかな海を見つめ「帰ろう」と呼びかける上官の一言が彼らにとっての戦争の終わりを意味していることを教えてくれています。主役の二人を演じる堤真一と山田裕貴の演技には圧倒されっぱなしでした。